

0 150 cm 10 20

SEKISUI JUSHI



義濃持義納款



本利編

めり

|                                                                                       |
|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 544                                                                                   |
|  |
| 3                                                                                     |

106



永正八年<sup>辛未</sup>十二月廿七日  
當社の遷宮を執るゝの  
かゝり廿一日に守殿  
政房御祭福後駈け  
て参りてこれに山の松  
乃子と峯と新開乃左  
川を参りて参りし  
ふいとかりひく十首の瓦

碓と泳しゆり作當社  
金山彦大神とのとひ  
跡と垂ましくあつて  
まいはるりふうゆん中  
比天武天皇の御時神感  
地みまいたあつて  
當國の一宮ふあつて  
まあつて

かみ神王とてなこを  
あつて五十二年とて社  
と造あつて玉を  
あつてとて遷宮  
あつて儀式  
あつてとて  
あつてとて  
あつてとて  
あつてとて  
あつてとて

明節云ふに逢ふべく山乃  
名をうく来いふをわめや  
来さる山ともいふゆゑに  
象頭山象背山象尾山  
といふ三有象背と中心と  
いふは是則この山也  
鳥居ふと正一位勲一等  
中山金山彦大神と象  
なりとふかぬ南宮とて  
なりとふかぬ南宮とて  
明神といふやふ候なり  
金山彦ハ各所の神は  
てわたりしものと南宮と  
いふ傳ふかハ諏訪を勧  
請しなむといふやふ

ゆふ神事も飯訪よりい  
やみきすにゆりけを  
ひきふあいやあき  
あなりと昔よりと執  
とこなりとゆきと神意  
の感應もあきとく國家  
の武運もたのしくえ  
えゆり去寛正二年辛巳

秋の遷宮より八葉より  
まゝてゆりて其世の人  
今いひよりあきとく  
まけりといやゆりけ  
たきなり世もあきとく  
とゆりけいゆりといや  
五月廿七日愚息利常  
よりあきてゆりけ

わつひるが老の辰ふは  
みく神とあふく世中を  
れうも成るそは建也今  
とあふ人修建をふかえ  
あふもやまわたり  
やも此ふいまうとけり  
き當社の不斷如法經  
愚願あふもとの世ま

てとくふうふふふふ  
定なりてふふふふ世  
の結縁なれふふふ  
ふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふ

詠十首初哥

伴立守藤原利綱

五十年のまゝりせうふいせま道  
二ふいせいの神やうふい

和答権律師秀永

ま道五十年のまゝりのじとせ  
二ふいせいのまゝりせうふい

利綱

白き乃ありさあふんまて神垣の  
象の山松をふうまてふ

秀永

神垣の象の山松いふまて  
雪れあふふうまてふ

利綱

色ふの白玉椿人の心  
神や八代の子うふん

秀永

梓弓八千代をそその心乃

白玉椿さうやうやう

利綱

水神樂更ひきききき

美代より象の中心

秀永

美人の中心の中心

おもしろい夜ふし

利綱

柿のわいし柿えうし高の

柿の柿えうし柿えうし

秀永

柿の柿えうし柿えうし

柿の柿えうし柿えうし

利綱

志つり内は晴るもくすみなり

象の尾心乃巖暮月貌

秀永

志つり内は晴るもくすみなり

象の尾心乃巖暮月貌

秀永

志つり内は晴るもくすみなり

象の尾心乃巖暮月貌

秀永

志つり内は晴るもくすみなり

象の尾心乃巖暮月貌

秀永

志つり内は晴るもくすみなり

象の尾心乃巖暮月貌

秀永

志つり内は晴るもくすみなり

子なま道と世にあらや

料網

はくふて今年も言ふまの波  
又やうじん国もな川

秀永

そのめはくふ海に紙のハ  
いく年うふの国もな川

料網

井垣ふ其曉とくふくおふ  
はくふもな川にふくも

秀永

ゆふれも曉いてんはくふ  
あふはくふもな川

九州大學圖書印

